爪の力

― 自己表象としての「ネイル」を楽しむ女性たちへのインタビュー調査から ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
関塚　倫子

近年，指先の“爪”に何らかのアートを施す“ネイル”というおしゃれが女性たちの間で広く普及してきている。本研究では，現代の日本の女性にとってのネイルを社会学的，心理学的に考察するために，爪および爪の装飾の持つ役割やイメージ，歴史などをふまえた上で，実際にネイルを楽しむ女性 5 名にインタビュー調査を行った。

爪の装飾は，地位身分や部族などを示す“表示的欲求”，マジックや霊的象徴といった“信仰的欲求”を目的として，古くから行われていた装身行為である。これは，現代の“ネイル”にも繋がっていると考えられる。

女性たちへのインタビューからは，ネイルが「自分の楽しみ」や「自己表現」であることが語られ，それぞれが自分らしくネイルを楽しんでいる姿を捉えることができた。女子力や男性受けのための美容行動といった世間イメージとは異なり，女性たちの娯楽や自由な表現の方法として機能していることがうかがわれた。

爪は身体の先端にあるため，自分の身体の中で最も他者に近く，また，自分自身の目に映りやすい部位である。その部位が“ネイル”として一つの作品になったとき，自分の身体の一部でありながら，自分を離れた“物”としても捉えることが可能になる。このような爪という部位だからこそ，ネイルに自分を投影したり，ネイルで自分を表現したりすることができ，一種のまじないのようなものとして力が発揮されるのだろう。